

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

### 経済学部生のための言語学関係新刊紹介

近頃、言語学が少し(だけ)ブームになっているようだ。YouTubeチャンネル「ゆる言語学ラジオ」はチャンネル登録者が20万人を優に超えており、今井むつみ・秋田喜美(2023)『言語の本質』(中公新書)も「たちまち15万部突破!」と出版元から宣伝されている。そこで本稿では、経済学部生にも参考になりそうな言語学関係の新刊を2つの分野に絞って紹介したい。

まずはオノマトペ・音象徴関連。音象徴とは簡単に言えば「音が人に与えるイメージ」である。例えば「ギガージ」という名前のシャンプーがあってもあまり売れそうにない。怪獣で「ポポッチ」と「ドアゴン」、どっちが強そう?と聞かれれば、多くの人は後者と答えるだろう。これらの例を見るだけでも、新商品名や広告などでどのような音やオノマトペを使うかが重要な意味を持つことが分かるが、近年このテーマの一般書が多く出版されている。先に挙げた『言語の本質』もその一つだが、秋田喜美(2022)『オノマトペの認知科学』(新曜社)は豊富な例をもとに基礎から分かりやすくこの分野について学ぶことができる。また川原繁人(2022)『言語学者、外の世界へ羽ばたく』(リベラルアーツコトバ双書)は概説書というよりはエッセイに近いが、ポケモンやプリキュアを題材とした音声学研究がどのように生まれ発展したかが述べられており、研究テーマの見つけ方や進展のさせ方なども学ぶことができる。川原は他にも多くの興味深い一般書を刊行しているので探してみるのもよいだろう。

次にコミュニケーション論関連を紹介する。あまり意識されないが、コミュニケーションの「常識」は人によってかなり異なり、日常会話から商談まで、この「常識」の違いがいかにかに深刻な誤解を生みだし、

またそれをどうしたら避けることができるかを知っておくことはかなり役に立つ。石黒圭(2023)『コミュ力は「副詞」で決まる』(光文社新書)は、国語や英語の授業ではやや軽視されがちな副詞が、実際には話し手の心情の機微をいかに細やかに伝えているかを具体的に説明しており、一読することでかなり話し方が変化するだろう。村田和代(2023)『優しいコミュニケーション』(岩波新書)は、ビジネス会議やまちづくりでの話し合いをどのような気遣いをするかで円滑に進めさせることができるかを社会言語学の観点から平易に説明している。井上逸兵(2021)『英語の思考法』(ちくま新書)は日英のコミュニケーション戦略の違いについておやじギャグを交えて説明しているが、同時に英会話のコツも学ぶことができる。

自身の使う言葉が他者にどのように受け止められるかを知っておくことは、社会生活を送る上で知っておいて損はないだろう。

(評／『彦根論叢』編集委員／出原健一)

